

## 直喩のポエジー 武富純一

「短歌」十一月号「第六十三回角川短歌賞」を読む。受賞作は陸月都「十七月の娘たち」。

・沼ちかく棲まへるわれや病める目にときをり娘の幻覚を見つ  
 ・わが生まぬ少女薔薇園を駆けゆけりこの世の薔薇の棘鋭からむ  
 に

作者は平成三年生まれの女性。母、妹との暮らしに、かつて何らかの理由（おそらくごく初期に）で喪失した娘への思いが幻覚や想像となって時や場を変えつつ詩情豊かに語られてゆく。

・十七月の夜のカタン 娘はいまゆめみるごとく領地広げて  
 タイトルとなつた一首。カタンを調べたらドイツのボードゲームとあった。七月とはいったい何だろう？。選考会でも話題になつているが、私は娘を喪失してから現在までの時間の長さだと想像した。作者にとつてその時間経緯の感覚は一年（十二月）を超えても一年五ヶ月と区切られる日々には決して変容せず、さらにこれからも十八、十九月…と永遠に月の単位で増え続けてゆくしかない時間なのだ。

巧みな直喩（やうな、ごとく）が多くみられる。ざっと数えて十四首。他の作品も数えてみたが群を抜いて多い。

・春の夜によそふシチューのごろごろとこどもの顔沈みぬることく

・婚なさず子なさずをれば一日がシロツメクサのやうな涼しさ  
 ・真夜中の人の胃のなかにゐるやうでなままたたかし春の風は

・パーティにわれらはわらふ誰とあても貿易風のやうに笑へる  
 ・宴すぎて廃墟のやうなりビングの朝のあかるさ揺れるカーテン  
 一首目、シチューのジャガイモを沈む子供顔に喩えたおどろおどろしさ。二首目、シロツメクサの持つどこか冷たいイメージと寂しげな心象が重なる。三首目のなんとも不気味な印象は、選考委員の東直子が「あたたかさを一方的にいいものとして描くのではなくて、ちよつと胃の中において気持ち悪さもあるという清濁併せ呑む感じとか、この世の怖さとか不思議さとかを予見しているところがある。」と述べる。四首目は地球上に常に安定して吹いている風のイメージと友達つきあいとの軽い相似性か。五首目、喧噪の翌朝のリビングの静かな雑然と廃墟の重なり。

太古の昔、まだ言葉が未発達だった頃、海を見たことが無い人にある「空」をあげて「水がまるでこの空のようにどこまでも広がっているんだ」と話したとき、直喩が生まれたのだと私は夢想する。相手が知らないものをなんとかして正しく伝えたい必死な心が直喩を進化させてきたのだ。

詩の世界での直喩とは喩える言葉、喩えられる言葉、双方が背負っているイメージの複雑な連鎖反応であり、イメージを喚起させる言葉のセンスを直接的に問われるレトリックだが、この作者はいずれも微妙な摩擦感を伴う言葉同士を巧みにかつ自然な感じをつなぎ止める力を持っている。

選考会の総評で小池光は「短歌は詩でなければならぬという、その詩精神、ポエジーというものが一番濃厚に漂っていて、わからない歌もあるけど言葉の様式美として優れている。」と語る。直喩の成功がその要因のひとつであろう。短歌の本質である詩情性を備えた若き受賞者のこれからが楽しみだ。